作文（中学生）の部 国土交通事務次官賞（優秀賞）

「　土砂災害の恐ろしさ　」

福井県　福井市足羽第一中学校　１年　吉田（よしだ）　陸（りく）

「土砂災害」と聞いて真っ先に頭に浮かんだのは、先日テレビで見た、静岡県熱海市で起こった大規模な土砂災害です。普通の住宅だけでなく、旅館のような大きくて丈夫そうな建物までが、一瞬にして山の上から崩れ落ちてきた土砂に巻き込まれて大きく崩れ落ちてしまったのです。アクション映画にでも出てくる光景のようで、最初は現実とは思えませんでした。さっきまで普段通り暮らしていたのに、土砂崩れは突然起こり、あっという間に暮らしを 180 度変えてしまうのです。強い雨が一度に降ったり、長い期間雨が降って地盤がゆるみ、山の木や岩を支えていた土が削れてしまい、大きくて重いからものすごい速さで崩れ落ちてきます。何人もの人が亡くなったりケガをしたり、自然災害ほど恐いものはないのではないかと思ったくらいでした。

また、母からは福井豪雨の時の話を聞きました。平成 16 年の夏だったそうです。僕はまだ生まれていませんでした。その時も、たくさんの雨が長い間降り続いていて、ちょうど母は少し小高い所にある障がい者支援施設の職員で、夜勤で働いていた時だったそうです。職場は小高い所にあったので、何の影響もなく、最初は雨がひどいなぁ。くらいにしか思っていなかったそうですが、ふと、外を見ると、窓から見える足羽川が、いつもの川ではなく、海のように広く茶色に濁っていて、大きな木や家の中にあるはずの布団やテーブル、車までもが流れていて、びっくりを通り越して言葉も出なかったそうです。

やっと雨が止んで次の日、同じ職場の人も数人家が被害に合ったそうで、復旧のお手伝いに行くと、これまた想像を絶する光景だったそうです。近くの山の土砂が押し寄せてきて、地面に駐車してあったはずの車が、水を含んでさらに重くなった土砂に押し上げられて、なんと車庫の屋根の上に車があったそうです。お風呂の窓ガラスも崩れてきた土砂の勢いで割れて、湯舟は土砂で埋まり、台所もお米や食器、フライパンなどがいたるところに散乱して土砂に埋まっていたそうで、母の話を聞きながら、想像が追いつかないくらいひどい状況だったことは理解できました。

県外からもたくさん消防隊員やボランティアの方も来て下さって、何日もかけてみんなで家の中に入った土砂を外に出したり畳の泥を落として乾かしたり、幸い家族みんなで避難して命は大丈夫だったものの、自分の家の様子を見た時の住人の気持ちを考えると、居ても立っても居られなくてみんなで一生懸命、真夏で暑い中でも必死で復旧作業をしたことを覚えていると母は何度も話していました。また、被害に合われた方達は、一瞬にして幸せな生活も財産も奪われてしまって、猛暑の中公民館で避難生活で、水も電気も止まってトイレも流れず、すごく精神的にも肉体的にもつらいはずなのに、暑い中一生懸命お手伝いしてくださる皆さんの気持ちが本当にありがたいと笑顔で話していたそうで、困った時はお互い様、助け合いの心の温かさをすごく感じたと、話ながら母は涙を流していました。

テレビで見ても、母の話を聞いても、たくさんの人が犠牲になる土砂災害はとてつもなく恐ろしいものだと改めて感じました。一瞬で家が土砂に埋まり、大事にしていた服や物が無くなってしまってとてもかわいそうだと思っていました。どこか他人事でした。でも、最近日本のいろんな県での土砂災害の映像をテレビで見るようになり、異常気象で大雨も特別なことではなくなってきていて、次の被害者は僕かもしれないと思うようになりました。避難指示なども早めに出すようにしていたり、土砂崩れが起きにくいように塀を作るなど、県や市の人も色々な対策を進めているみたいですが、その途中でも、いつ土砂災害が発生するかは誰にも分かりません。早めに避難することももちろん大切ですが、普段からハザードマップで避難場所を確認して家族全員が分かっているようにしておくこと、地域で協力・連携して特に避難が遅れがちなお年寄りの家をチェックしておいて、取り残されることがないようにすること、防災グッズを用意しておくこと、また、防災訓練にも積極的に参加して、いざという時に焦らず、慌てず、自分勝手な行動をとらずに、常にみんなと協力して助け合うことを忘れずに避難できるように訓練しておくこと。など、まず僕に出来ることから対策をしていくことが大切だと感じました。

できれば起こってほしくない土砂災害だけど、僕の所は大丈夫だろうではなく、いつ起こってもおかしくないという気持ちで、一人一人が自分にまずできることを普段から意識していくことを、みんなにも広めて、少しでも犠牲になる命がなくなればいいなと思います。